

# 茨城県における輸入魚を原料とした水産加工品の生産動向

石川 和 芳

Main processed marine products from imported materials in Ibaraki Prefecture

Kazuyoshi ISHIKAWA

キーワード：輸入魚、水産加工、煮タコ、シシヤモ

## 1. はじめに

近年の我が国における海外からの水産物輸入量は目覚しく、1996年は金額では史上最高の実績を達成し、1兆9000億円、数量では345万トンとなっている。これは1996年の漁業生産（2兆2000億円、742万トン）に対し、金額ではおよそ86%、数量では46%に相当しており、水産物の輸入がいかに大きいものであるかがわかる。

ところで、茨城県における1996年の水産物の加工生産は18万4千トン、金額で930億円と盛んであり、茨城県は全国有数の水産加工県となっている。このうち、輸入魚を利用した加工品に、茨城県の主要な加工品である煮タコ、塩干シシヤモ、塩干ホッケなどがあるが、そのうち煮タコ、塩干シシヤモは技術改良を積み重ね、全国に先駆けて製品化されたものである。

煮タコは1963年頃、那珂湊地区の加工業者によってアフリカ産タコを用いて現在の製品製造に成功したと言われている。また、塩干シシヤモについてはすでに1968年にアイスランド産シシヤモを用いて那珂湊地区で開始されている。なお、身欠ニシンも1966年頃独航船によって漁獲されたニシンを用いて大洗、那珂湊地区で生産が開始されたものである。

本報告では、茨城県における輸入魚を用いた主要な加工品である煮タコ、塩干シシヤモ、塩干ホッケ、身欠ニシンに関する近年の生産動向について分析を試みた結果について報告する。

## 2. 方 法

茨城県における煮タコ、塩干シシヤモ、塩干ホッケ、身欠ニシンの生産量、生産金額に関しては1984年～1996年について「茨城の水産」から収集した。なお、煮タコには蒸しタコ、味付タコ、酢タコ等も含めた。また、我が国におけるタコ、シシヤモ、ニシンの輸入量、輸入金額については日本水産物輸入協会の資料によった。ただし、ホッケの輸入統計は入手できなかったため割愛した。塩干ホッケ、身欠ニシンの全国生産量については「水産物流通統計年報」の資料によった。

煮タコの全国生産量については、原料に対する製品の

平均歩留りを75%とみなし、輸入量 $\times 0.75$ として算出し、塩干シシヤモの全国生産量については、原料に対する製品の平均歩留りを70%とみなし、(北海道の漁獲量+輸入量) $\times 0.70$ として計算した。

茨城県におけるタコ、シシヤモ、ニシンの使用量はそれぞれ $(1/0.75, 1/0.70, 1/0.70) \times$  (茨城県の加工生産量)として算出した。

なお、1965年～1980年における輸入量及び茨城県の使用量は「茨城加工研たより、第63号」(1983年12月)から抜粋した。

## 3. 結果及び考察

### (1) 煮タコ生産の動向

得られた資料を整理した結果は表1に示してある。この資料に基づき煮タコ、塩干シシヤモ、塩干ホッケ、身欠ニシンそれぞれの生産動向について考察することとする。

図1に示すように、茨城県の煮タコ生産量は1990年頃まで増加傾向を示し、1988年～1990年までの3年間は2.7～2.9万トンと飛躍的に増加した後、再び減少し、1991年以降は2万トン前後である。

次に、生産金額をみると生産量と同様な傾向がみられ、1990年頃までは増加傾向を示し、1985年には170億円台であるのに対し、1988年から1990年にかけて390億円～510億円台と急増し、その後減少し1996年には230億円台となっている。

また、煮タコのキロ当たり単価をみると、1985年には1,305円であるが、1990年には1,797円と1.4倍に上昇し、その後は下落傾向を示した後、1996年には1,170円にやや回復している。

このように、茨城県の煮タコ生産は1988年～1990年にかけて生産量、生産金額ともに上昇し、単価も同様に上昇するという傾向がみられ、生産量の増加より生産金額の上昇の方が大きいのが特徴である。

1988年～1990年にかけて茨城県の煮タコ生産量が急激に増加しているのは、1989年前後の日本経済の高度成長期において、正月用食料品などとしての煮タコの消費増

表1 茨城県における輸入魚を用いた主な加工品

(上段：生産量 トン、中段：生産金額 百万円、下段：キロ単価 円)

	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
タコ	14,794	13,300	15,989	19,713	27,565	27,145	28,746	17,676	20,106	17,828	20,640	22,523	19,807
	18,520	17,354	19,541	27,549	39,089	41,841	51,659	29,340	29,630	15,923	16,692	23,066	23,177
	1,252	1,305	1,222	1,398	1,418	1,541	1,797	1,660	1,474	893	809	1,024	1,170
塩干シシャモ	6,696	6,180	6,428	5,741	5,572	6,091	4,189	4,672	4,333	5,792	4,965	6,664	15,178
	5,886	6,099	6,959	5,507	5,371	4,984	3,635	4,998	5,633	7,200	2,929	3,665	8,196
	879	987	1,083	959	964	818	868	1,070	1,300	1,243	590	550	540
塩干ホッケ	131	110	510	432	259	251	556	341	441	1,323	2,086	1,525	2,812
	53	45	255	264	158	151	334	205	353	968	668	488	956
	412	409	500	611	610	602	601	601	800	732	320	320	340
身欠ニシン	1,654	1,436	923	825	876	700	554	744	600	453	351	340	275
	1,206	1,152	991	659	698	555	418	660	450	336	221	214	179
	726	802	1,074	799	797	793	755	887	750	742	630	629	651

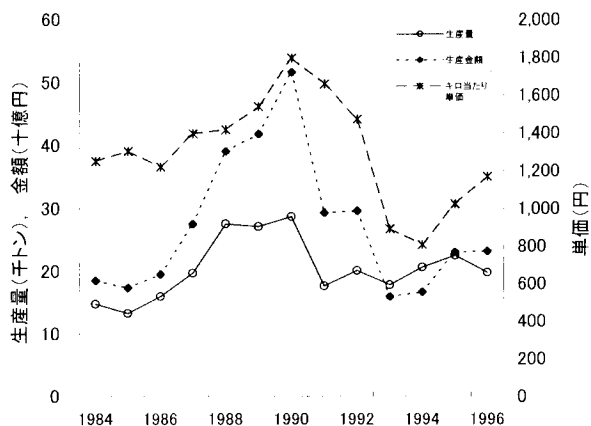


図1 茨城県における煮タコ生産の年別変動

加に伴い、煮タコ生産加工場が増加していること、また単価も上昇しているのは輸入原料のタコが品薄であること(表2から1988年～1990年の輸入量：10万トン前後に対し、1991年～1993年の輸入量：11万トン～13万トン)によると考えられる。

一方、1991年以降単価が値下がりしているのは輸入量の増加及び日本経済の低迷による消費減少などによると考えられる。

茨城県の場合、煮タコの原料はほとんどをアフリカ産タコに依存しているが、表2に示すように過去13年間のタコ輸入量は1993年頃まで増加し、1993年の131千トンをピークにその後はアフリカ産タコの乱獲による資源減少などに伴い、現在まで減少傾向を示している。しかし、原料のほとんどは現在も従来と同様アフリカ産タコであ

表2 輸入原料の年別変動

(上段：輸入量 トン、中段：輸入金額 百万円、下段：キロ単価 円)

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
タコ	98,603	106,956	99,916	99,874	111,680	91,523	113,263	122,770	131,121	105,774	97,898	96,479	79,056
	55,187	59,005	45,579	54,111	61,987	51,657	63,882	52,829	42,967	43,523	49,906	65,320	55,524
	560	552	456	542	555	564	564	430	328	411	510	677	702
シシャモ	36,595	35,891	24,007	41,809	39,977	35,177	18,639	19,865	31,038	20,213	21,752	48,566	28,606
	9,575	9,504	4,965	10,299	9,477	8,034	3,858	4,347	7,900	4,966	4,225	9,734	6,268
	262	265	207	246	236	228	207	219	255	246	194	200	219
ニシン	71,765	62,710	66,641	79,451	51,253	75,696	74,393	80,722	61,942	70,378	81,104	69,381	61,396
	22,319	15,914	16,717	19,260	10,487	17,033	17,116	14,991	10,448	10,076	12,152	13,307	9,797
	311	254	251	242	209	225	230	186	169	143	150	192	160

表3 タコ等の輸入量に占める茨城県の使用割合

(量：トン、占有率：%)

	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	1996
タコ								
輸入量	不明	35,640	74,613	63,466	98,603	91,523	97,898	96,479
茨城県使用量	6,004	28,225	15,420	12,321	17,689	38,232	29,955	26,343
茨城県占有率	不明	79	21	19	18	42	31	27
シシヤモ								
輸入量	0	不明	不明	31,601	36,599	35,177	21,752	48,566
茨城県使用量	0	不明	11,235	8,382	8,219	5,571	8,863	20,186
茨城県占有率	0	不明	不明	27	22	16	41	42
ニシン								
輸入量	不明	不明	8,856	30,144	71,765	75,696	81,104	69,381
茨城県使用量	13	7,722	9,600	2,936	1,900	737	452	365
茨城県占有率	不明	不明	不明	9.7	2.7	1.0	0.6	0.5

るが、近年では一部中国産やメキシコ産も利用されている。

表3に示すように、茨城県におけるタコ使用量は1970年には2.8万トンであり、輸入量に対する茨城県の使用量は那珂湊地区を中心に約8割を占めているが、その後県外の生産量の増大等により茨城県の割合は次第に低下し、近年では輸入量の3割前後となっているが全国一の生産を維持している。

## (2) 塩干シシヤモ生産の動向

茨城県における1984年から1995年までの塩干シシヤモの生産量は図2に示すように、年間4,200トン～6,700トンで推移し大きな変動は見られないが、1996年は15,000トン台であり、前年の約2.3倍に急増している。

生産金額についても1984年以降1993年まではおよそ40億円～70億円で推移しているのに対し、1994年、1995年には約1/2の30億円前後に急減し、再び、1996年に80億円台を回復し生産量と同様の傾向を示している。

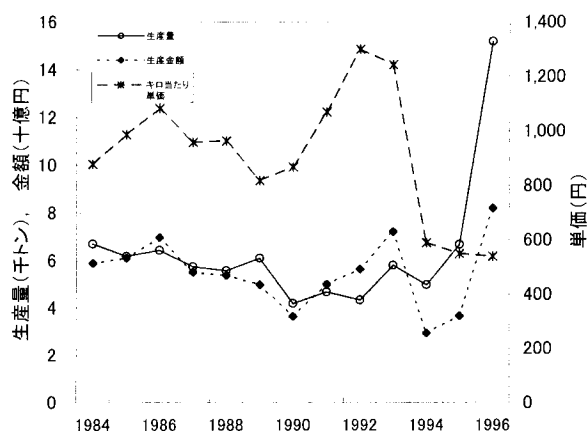


図2 茨城県における塩干シシヤモ生産の年別変動

また、キロ単価は1991年までは1,000円前後で推移しているが、1992年、1993年に1,300円前後に上昇した後、1994年以降は再び半値以下の500円台に下がったまま推移している。

茨城県の塩干シシヤモについては1991年～1993年にかけて生産量、生産金額ともに大きな上昇はみられないにもかかわらず単価が上昇していること及び1996年に生産量が急増し、生産金額も上昇しているにもかかわらず単価は低迷したままであることが特徴である。

塩干シシヤモの生産量が1996年に急増しているのは表4に示すように、輸入先のノルウェー産のシシヤモが資源の枯渇により1994年頃から生産調整を実施しているため輸入が皆無状態であるのに対し、ノルウェー産に代わって近年ではアイスランド産やカナダ産の輸入量が増加し、総輸入量が22千トンから50千トンに前年比2.3倍に増加していること（ただし輸入シシヤモの魚体は年々小型化し、1998年にはキロ60尾サイズが7割を占めている）及び無選別製品の出荷によりコストが削減され、消費の増大に結びついていることなどによると推測される。

また、1991年～1993年にかけて生産量、金額ともに大きな変動がないにもかかわらず単価が上昇しているのは、1988年～1990年における輸入量が3.5万トン～4.2万トンであるのに対し、1991年、1992年には大きく減少して1.8～2.0万トンになっていることなどによるものと考えられる。

一方、1994年以降単価が500円台に低迷しているのは、為替レートが1992年、1993年の1ドル140円前後であるのに対し、1995年、1996年には110円～80円に上昇していることによって、輸入価格が下落していること及び長引く景気の低迷等によることが大きいものと考えられる。

なお、シシヤモ輸入量に対する茨城県の占有率は表3にみられるように1980年には27%であるが、1990年に

表4 シシヤモ輸入量

(単位 トン)

年	ノルウェー	アイスランド	カナダ	全体
1989	1,408	4,450	33,569	39,977
1990	2,407	2,563	28,962	35,177
1991	3,028	130	15,214	18,639
1992	5,140	2,418	11,874	19,865
1993	9,154	5,159	16,033	31,035
1994	0	17,300	500	17,800
1995	0	16,000	5,750	21,750
1996	0	38,000	12,000	50,000
1997	0	19,000	9,600	28,600
1998	0	20,000	12,000	32,000

16%に下落した後上昇し、1996年には42%に達し、輸入量の約1/2弱を占めており、茨城県の生産量がいかに大きいかかわかる。

### (3) 塩干ホッケ生産の動向

茨城県における塩干ホッケの生産量は図3に示すとおり、1992年頃までは600トン以下であるが、1993年には1,300トン台まで急増し、1996年にはさらに2,800トンに達している。

生産金額についても1992年までは4億円以下であるのに対し、1993年以降は5～10億円に伸びている。

一方、キロ単価をみると1991年までは約600円以下であるが、1992年、1993年には730円～800円にやや上昇し、1994年以降は再び300円台まで下落し、以前の半値以下のまま低迷している。

このように、塩干ホッケについても塩干シシヤモと同

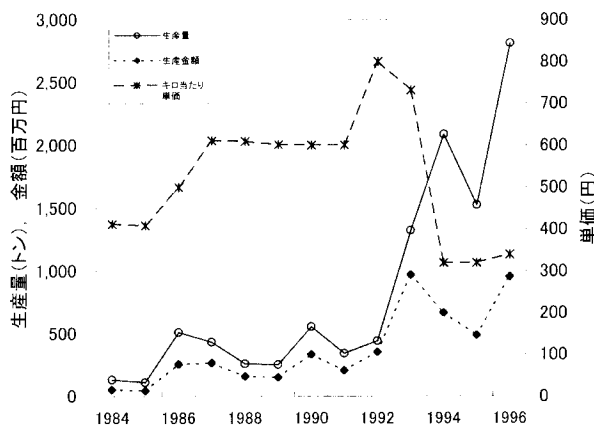


図3 茨城県における塩干ホッケ生産の年別変動

様な変動がみられ、1993年以降生産量が急増しているにもかかわらず、単価は1994年以降逆に1/2以下の300円台のまま推移しているのが特徴である。これは、塩干シシヤモと同様に円高による輸入単価の下落や生産量の増加による過剰在庫などによるものと考えられる。

ところで、ホッケの原料としてはシマホッケとマホッケがあり、シマホッケは輸入品、マホッケは北海道を中心として漁獲される国産品といわれているが、茨城県で加工原料に使用されているのは大部分が価格の安い輸入品のシマホッケである。

次に、ホッケについては輸入量の統計資料が得られないので、表5から全国生産量に対する茨城県の占有率をみると、1989年以降の塩干ホッケの全国生産量は14,300トン～18,000トンで大きな変動はみられないのに対し、茨城県の生産量は1992年以前はおよそ500トン以下であるのに対し、1996年には2,800トンへと大幅に増加している。このため、全国生産量に占める茨城県の占有率は1989年の1.6%に対し、1996年には15.6%と約10倍に急増し、1996年には北海道に次ぐ生産県となっている。

このように、近年における茨城県の占有率が上昇しているのは、それまでのホッケ開干の需要が主に北海道、東北地方であるのに対し、1992年、1993年頃から関東地方においても消費が伸びてきていること、1989年から1996年までの漁獲量が10万トンから18万トンに増加しているように、ホッケ自体が安価で資源的にも安定していること及び既存の乾物販売ルートを活用できることなどから、大洗地区を中心に他の加工生産からホッケ加工生産に転換する加工業者が増加していることによると考えられる。

表5 全国の生産量に占める茨城県の生産割合

(量：トン、占有率：%)

		1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
煮タコ	全国生産量	80,217	74,937	74,905	83,760	68,642	84,947	92,077	98,340	79,330	73,423	72,359
	茨城県生産量	15,989	19,713	27,565	27,145	23,746	17,676	20,106	17,828	20,640	22,523	19,807
	占有率	20	26	37	32	35	21	22	18	26	31	27
塩干シシャモ	全国生産量	26,918	18,005	29,557	29,143	25,649	13,957	14,653	22,780	15,009	16,784	34,896
	茨城県生産量	6,428	5,741	5,572	6,091	4,189	4,672	4,333	5,792	4,965	6,664	15,178
	占有率	24	32	19	21	16	33	30	25	33	40	43
塩干ホッケ	全国生産量	11,490	12,479	14,267	15,856	14,473	16,172	16,189	17,298	16,085	15,748	17,990
	茨城県生産量	510	432	259	251	556	341	441	1,323	2,086	1,525	2,812
	占有率	4.4	3.5	1.8	1.6	3.8	2.1	2.7	7.6	13.0	9.7	15.6
身欠ニシン	全国生産量	19,060	19,386	17,677	15,990	18,496	17,622	16,309	15,902	20,363	15,089	16,774
	茨城県生産量	923	825	876	700	554	744	600	453	351	340	275
	占有率	4.8	4.3	5.0	4.4	3.0	4.2	3.7	2.8	1.7	2.3	1.6

#### (4) 身欠ニシン生産の動向

身欠ニシンについては以上述べてきた煮タコ、塩干シシャモ、塩干ホッケとは異なり、図4に示すように、1985年までは茨城県でも1,500トン前後の生産量をあげているが、1986年以降は漸減傾向を示し、1996年には300トン弱までに減少している。

生産量の減少に伴って生産金額も1984年、1985年における12億円から次第に減少し、1996年には1.8億円にまで減少し茨城県における加工生産金額の約0.2%を占めるに過ぎなくなっている。

しかし、キロ単価は1986年の1,000円台を除くと、1987年以降は630円～890円の価格が維持されており、大きな値下がりは見られず、キロ単価は安定しているのが特徴である。

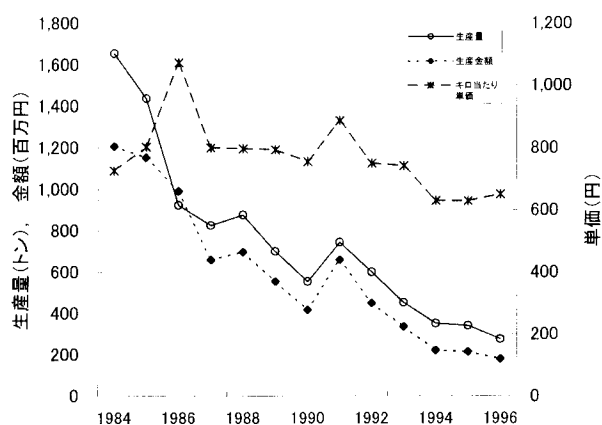


図4 茨城県における身欠ニシン生産の年別変動

近年大幅に生産量が減少しているのは、多くの加工業者が生産の安定、消費者嗜好の変化、原料価格の低廉などにより、従来の身欠ニシン生産からシシャモ、ホッケ等の開下へ転換していること及び国内資源の大幅な減少（1986年は73,000トン、1996年は2,000トン）などによると考えられる。

また、近年生産量及び生産金額が大幅に減少しているにもかかわらず、単価が安定しているのは販売量、価格などについてある程度話し合っ注文に応じた生産をしていることによると考えられる。

なお、輸入量が大きく減少していないのは輸入ニシンにはカズノコ生産を目的とした抱卵ニシンが多く含まれているためであり、1975年に輸入量より茨城県の使用量が多いのは国内で漁獲されているニシンも身欠ニシンに使用されているためであると考えられる。

このようなことから、身欠ニシンの1986年以降の全国生産量は15,000トン～20,000トン（表5）であり、年変動はあるものの大きな変動はみられないにもかかわらず、輸入量に対する茨城県の占有率は1980年には9.7%を占めているが、1996年には0.5%まで大幅に低下している。

#### 4. 要 約

- (1) 輸入原料を用いた主要な水産加工品である煮タコ、塩干シシャモ、塩干ホッケ、身欠ニシンについて茨城県における近年の生産動向を分析した。
- (2) 煮タコ生産量は1988年から1990年にかけて毎年3万トン程度生産され、その後漸減傾向を示し、1996年には2万トン弱となっている。

茨城県の煮タコ生産は1988年～1990年にかけて生産量、生産金額とも増加するに伴い、単価も上昇するという傾向がみられ、生産量の増加に比べて生産金額の上昇の方が大きい。

- (3) 塩干シシャモの生産量については1995年頃まで7千トン弱であるが、1996年には15千トン台に急増している。一方、単価については1994年以降経済の低迷等により、以前の1/2以下の550円前後で推移している。

塩干シシャモの場合、煮タコと異なり1996年の生産量、金額の急増が単価の上昇につながらず低迷したままである。

- (4) 塩干ホッケの生産量については1992年までは500トン以下であるが、その後1993年頃から急増し、1996年には3千トン近くまで上昇している。しかし、単価は1994年以降300円台で低迷したまま推移している。

- (5) 身欠ニシンの生産量については1985年頃は1.5千トン前後の生産をあげているが、近年では大幅に減少している。しかし、単価はあまり下落せず、1987年以降630円～890円で安定している。

最後に、水産物の輸入動向は様々な要因により左右されるが、茨城県における輸入魚に対する依存は今後とも当分の間は増大するものと考えられる。しかし、近い将来輸出国における漁業生産動向や需用増大などにより、日本への輸出割当量が削減され、円滑な輸入が持続できなくなる可能性が考えられる。

そのような状況に直面した時の対応策として、地先における原料確保のための資源維持対策、国内資源の適正な配分など原料魚の入手方法及び未利用資源などの有効利用対策、さらには輸入魚についての品質や安全性に関する消費者の意識などについて今から検討しておくことが必要であろうと考えられる。

## 5. 謝 辞

本報告をとりまとめるにあたり、県内の水産加工組合及び加工業者から種々の貴重な調査資料の提供及びご教示をいただいた。また、日本水産物輸入協会、茨城県統計事務所からは1984年以降の水産加工品に関する統計資料をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げる。